

春日和男著『説話の語文古代説話文の研究』, 春日
和男・原栄一共編『説話の語文日本霊異記漢字索
引』

迫野, 虔徳
熊本大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12114>

出版情報 : 語文研究. 42, pp.45-47, 1976-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

春日和男著 『説話の語文 古代説話文の研究』

春日和男 原栄一 共編 『説話の語文 日本靈異記漢字索引』

追野 虔 徳

このたび、春日和男先生は、先の「存在詞に関する研究」につづいて、右のような二著書を公にされた。後者の「日本靈異記漢字索引」は、原栄一氏との共編で、もと、前者と合してその付録として一書にまとめられるはずであったのが、「出版の都合上」右のように二書に分冊されたものという。

前者の「古代説話文の研究」は、これまでいろいろな雑誌などに発表してこられた古代説話文についての研究十篇（他に英文論文一篇）をあつめて一書とされたものである。春日先生は本学の学部・大学院の演習では、ながいこと、日本靈異記以下の各種古代説話集をとりあげてこられ、また、先般は、日本古典文学大系「日本靈異記」（共著）の執筆を担当されたりするなど、先生と古代説話とのかかわりは、あさからざるものがあるのであるが、そうした折々に考究された古代説話文についての諸成果をこのたび集成されたのである。「説話の語文」という本書の書名の由来については未だ聞き及んでいないけれども、「語文」は、本誌「語文研究」や故福田良輔先生の「古代

語文ノート」などのそれと同じく、語学・文学の意であろう。そういえば、本書第四部には、後述のように先生独自の説である「今は昔」の解釈からする古代説話の構文についての論があり、それは物語の祖「竹取物語」の構成や、かの「源氏物語」の桐壺巻論まで及んでいわゆる国語学の領域にひとりどまるようなものではないようである。「説話の語文」というのは、そのような含みでの書名かもしれないが、しかし、もとより本書は国語学的観点からの古代説話文の考察を主とした論著である。古代説話についての研究書は既にいくつか出されてはいるけれども、説話文を国語学的な見地から研究した論著は、実は意外にすくないのである。本書は、まずそのような意味からしても貴重な一書であるといわなければならぬであろう。

本書は、I 日本靈異記の本文と訓釈二題、II 三宝絵詞東大寺切の研究、III 「侍り」と「候ふ」の分布より見た「法華修法一百座聞書抄」の文体、IV 古代説話構文の原理、の四部からなり、巻末に付録として、「Tense and style in ancient Japanese

[Narratives] (古代説話の時制と文体) が付載されている。I には、一、興福寺本日本霊異記に見える「徴」字の訓釈について、二、前田家本日本霊異記の性格―「師自夏牟之」考―の二篇の論文を収める。前者は「徴徴多牟天天介止」(上・五)という興福寺本に見える意不通の訓釈、後者は、前田家本の「婦 師自夏牟之」(下・三八)という難解な訓釈について、それぞれの本来の形、意味などを手がたく推論したものである。ともに日本古典文学大系「日本霊異記」執筆の際に得られた成果という。II は、日本霊異記とも関係深い三宝絵詞、特に東大寺切についての研究。本書所収十篇の論文のうち五篇がここに収められていて、本書の中心的部分をなしている。三宝絵詞の伝本のうち平仮名書きのいわゆる東大寺切は散逸が甚しい。早く、山田孝雄博士がそれら各地に散在する断簡を集めて国語国文に翻刻されたことがあり、ごく最近、浜口博章氏が同誌上にまた少々追加翻刻されたが(三宝絵詞東大寺切について、国語国文44―7)、これら断簡の切り去られた残りが関戸家本で、これが三宝絵詞仮名書き伝本の基幹をなす。一、関戸家蔵冊子による本文と用字に、その関戸家本の忠実な翻刻及び国語学的な見地からの解説がなされている。いまのところ関戸家本についてうかがいうる唯一の文献である。以下に次の諸論考が収められる。二、三宝絵詞東大寺切管見―主として関戸家冊子と観智院本との比較による、三、草仮名または平仮名による字音語の表記、四、元永本古今和歌集の書写に関する一問題、五、古筆の仮名遣ひ―東大寺切・元永古今・源氏物語絵巻詞―、東大寺切は、①いうまでもなく、漢字片仮名交りの観智院本、漢字書きの前田家本と

ならんで平仮名で書かれた三宝絵詞の一伝本という位置にある文献であるが、しかし同時に、②その書写年月日が、保安元年六月七日という、古くかつ明確な点で、他になかなかとめがたい貴重な平仮名資料でもあるのである―しかも中に多くの字音語の仮名書きを含む。③の三種三様の伝本が存することは我々にいろいろな興味を抱かせるのであるが、二では、関戸家本と観智院本の文体論的見地からの比較検討がなされて、それぞれの性格が吟味されている。三の字音語の表記、五の仮名遣は、②の点をとらえての研究。このうち字音語の表記については、③の論考は、この方面の研究では比較的早いものに属して、しかも平仮名による字音語表記の実態をこれほど古い資料についてまとまった形で示し得たものはこの後も他にあまりなかった。この方面の研究では、しばしば引用されてきた周知の論文である。②の点に関しては、四では、元永本古今和歌集の書写年記・元永三年七月二十四日という日付け―これは東大寺切の保安元年と実は同年―に疑問を呈しておられる。Ⅲは、法華修法一百座聞書抄についての考察で、この文献の「侍り」と「候ふ」に、分布に偏りがみられることを指摘された。するどい指摘で、最近の小林考規編「法華百座聞書抄総索引」の「研究篇」における諸氏の、この文献の文体に論及したものには、しばしばこの指摘が参照検討されている。Ⅳの古代説話構文の原理は、先にもちょっとふれたが、既に前者の「存在詞の研究」においてもとよりあげられた「今は昔」ではじまる説話構文についての先生独自の見解の再説である。一、説話構文について―「今は昔」を中心に―は、国語学会設立三十周年記念講演でお話

なされたものに加筆されたもの。二、説話文体の効用——「今昔考」の終りに——は、このテーマによる一連の論考の総まとめを意図されたもので、「今は昔」「トナム語り伝ヘタルトヤ」という額縁で、説話内容を包むという構成を基本型式とする説話構文は、「作者個人の文責転嫁乃至軽減」という「効用」を有していたのではないかという考えを、「源氏物語」桐壺巻などを引いて述べておられる。巻末には、説話構文についての前記のような英文論文が付録として収められている。本書の引くところによれば、この説話構文について考察を加えた論考は、都合八篇、発表期間も十年間のながきにわたっているようで、この論題についての先生のなみなみならぬ執心のほどがうかがわれるようである。

別冊の「説話の語文・日本靈異記漢字索引」は、前記のように、春日和男先生と原栄一氏の共同作業による労作である。日本古典文学大系を底本として、本文の漢字はもとより、校異、訓釈の見出し語など底本の漢字すべてについてその所在が求められるようにしたもので、それぞれの漢字に番号を付して、部首引き、字音引き、いづれでも検索し得るように配慮されている。日本靈異記についての研究は、近年ますます盛んになりつつあり、それにつけても「索引」への渴望いよいよ激しいものがあったのであるが、それがともかくもここにこのような形でかなえられたのは、誠によるこびに堪えないことである。ただ得手勝手な使用者の立場からすれば、その漢字が更に実際の文中においてどのような形で使用されているのかということまで一目のうちに知り得たらという望蜀の念禁じ得ぬものがある

が、今日の靈異記研究の水準からすれば、これはやはりあまりに無理難題な要望といわなければなるまい。

(昭和五十年十一月刊、桜楓社、各四八〇〇円)